
照葉と未苗

辰野さとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

照葉と未苗

【Nコード】

N8007Z

【作者名】

辰野さとる

【あらすじ】

千字前後の百合短編の連作（予定）。照葉^{てるは}と未苗^{みなえ}という女の子の、不安だったり希望だったりがちらほら見える日常のお話。名言や逸話を拾ってきて、それを軸にした話作りを心がけるとおもいます。

ひとりきり（前書き）

ほのかに百合。女の子が『一緒にいる』というところの重点を置いた感じです。恋愛ものと友情ものの間で、恋愛寄り？ ぐらいです。

ひとりきり

定期テスト前。

照葉と未苗は、一緒にこたつに入って問題集を解いている。こたつの温度は少し低め。未苗の家のこたつは小さくて、お互いの体温がほのかに感じられる。

「うー、わたしも照葉ちゃんみたいに勉強できたらなあ」

未苗はぺたん、と机に突っ伏してしまう。長い間考えているのは苦手だった。

「私になっても仕方ないわよ。例えば、そうね。ガーシュウィンとラヴェルの話をしましょうか」

「だれ？」

「作曲家。ガーシュウィンは独学ですごい作曲家になったんだけど、やっぱりプロに教えてもらいたいと思ってたの。それで、有名な作曲家だったラヴェルに教えてもらおうとしたんだけど、『あなたはもう一流のガーシュウィンなんだから、二流のラヴェルになる必要はないでしょう』って言われたのよ」

ちよつとは未苗の気分が晴れるかな、という照葉の期待とは裏腹に、未苗はさらに考え込んでしまう。

「ううん……」

「ちよつとわかりにくかった？」

「わかった！ それじゃあ、わたし『照葉ちゃんの恋人』じゃないね！」

「え、あの、どうして……？」

照葉の心に、ふわふわとした綿菓子のような、とらえどころのない不安が浮かぶ。

未苗は照葉にとって、憧れの女の子だった。元気で、可愛らしくて、純粹で。閉じこもってしまいがちな照葉と違って、未苗はどんどん先へと進んでいくことができる。

照葉が一番憧れていたのは未苗のそんな姿であり、恐れているのもそれだった。

心を砕いて紡ぎあげた、なによりも守りたいこの関係。それが、小さなきっかけで変わってしまうような気がして。

「ガーさんも、ラヴェルさんも、世界でただひとりきりなんだよ。恋人なら何人でも作れるけど、同じ子はひとりもない。考えたくないけど……照葉ちゃんの恋人になれる人って、わたしのほかにもいると思う。だけど、『照葉ちゃんの未苗』になれるのはわたしだけだね」

「……私の恋人は、これからずっと未苗だけよ」

——未苗にとっても、そうだったらいいな。

照葉は寒さに震える手で、こたつの中の未苗の手を握った。繋いだ手を通して、温もりを伝え合う。

目には見えないけれど、確かに二人は繋がっている。

「えへへ、ありがとう」

そんな、冬の日。

てぶくろ(前書き)

こんなんぱっかりかよ？ こんなんぱっかりです！ たぶん！

てぶくろ

指先から寒さが染み込むような冬の朝。

「手、つなごー!」

未苗に屈託のない笑顔で見つめられて、照葉は動揺してしまう。

「う、うん……いいよ」

付き合う前から、手を繋ぐ事は多かった。それはとても普通なこととで、当たり前に行っていた。

けれど、意識して手を繋ごうと思うと、どうしても上手くいかない。

結局、未苗の手を握ろうとして、照葉の手は空を掴んでしまう。

「照葉ちゃん、どうしたの?」

「ごめんなさい。私、どうやって手を握ったらいいのか、わからなくなっちゃって」

わたし、なんて情けないんだろう。照葉は内気な自分が嫌になつて、雪に覆われた地面を見下ろした。

知っている場所なのに、雪に覆われているだけで、踏み出すのがこわい。

「んー、きつと考えすぎなんだと思うよ」

「でも、考えないと、怖くて……なにか、間違えてしまいそうで」「ねえ照葉ちゃん、キスの仕方、知ってる?」

「知ってるけど、そんなの、わからないわ。したこと、ないし…

…」

照葉の心臓がはじけそうになって、顔を真っ赤に染める。

二人は付き合い始めて日が浅い。キスなんてした事がないし、照葉は未苗と一緒に出掛けるだけでも緊張してしまう。友達よりも遠ざかったように見えるほど。

けれど、二人の心の距離は付き合う前よりずっと近い。

「手を繋ぐのも、キスするのも、そんなに難しいことじゃないよ。

でも、考えてもわからないかも。だって、わたし手の繋ぎ方なんて習ったことないもん」

だからね、と未苗は続ける。

「してみればわかるし、してみないとわからないよ！ ほら！」

未苗は照葉の手をしっかりと握り、笑いかける。

照葉はガラスに触れるような慎重さで、分厚い手袋越しに未苗の手を握り返した。

「ね？ もう握れるでしょ？」

「うん……臆病で、ごめんなさい」

「臆病でもいいよ。そういうところも含めて、照葉ちゃんのこと、全部好きだから！」

ぱらぱらと、小さな花びらのような雪が舞い散る。

「私も、その、未苗のこと……全部好きだから」

照葉は赤くなつた顔をマフラーで半分隠したが、ただでさえ熱くなつていた顔がもっと熱くなつてしまった。

学校には、まだ着かない。

水のような恋（前書き）

すこし長めです。

水のような恋

テストが終わった週末。二人は照葉の部屋で話をしていた。

これは、付き合い始めた二人の一番大切な儀式。話題はなんでもいい。二人のこと、家族のこと、そして、世界のこと。大小さまざまなことを、二人で向き合って真剣に話し合う。

好き合っているからといって、相手が自分と同じことを考えていると思いつくのはよくない。お互いが別の人間なのだから、同じになることなんてありえない。

だからこそ、こうしてお互いの同じところ、違うところを確認する儀式が必要なのだ。

「恋って、なんなのかな？」

今日の話題は、恋の話。持ち出したのは未苗の方だった。

「プラトンによれば、恋とは狂気らしいよ。恋することで、人は自分を制御できなくなってしまうの」

「照葉ちゃんは……いま、自分を制御できないの？」

「い、いや、ええと、それは、たとえ話だからっ」

慌てる照葉を見て、未苗はふふつと悪戯っぽく笑う。照葉は少しだけむくねながらも、未苗のことを怒れない。

そうやって笑っている時の未苗を、一番愛おしく思っているから。「でも、プラトンさんは恋が悪いものだって言ってるの？」

「ううん。恋は、神様からの素敵な贈り物なんだって」

「それじゃあ、わたしが照葉ちゃんと一緒にいられるのは、神様のおかげなんだ！ 素敵だね！」

照葉は顔を真っ赤に染めて、しかし未苗の方からは目を逸らさない。ずっと恥ずかしさに負けっぱなしなのは嫌だったのだ。

「ねえ、未苗はどう思うの？ 恋について」

「わたし？ ーとね、わたしは恋っていうのがなんなのか、よくわからなかった。でも、照葉ちゃんのおかげで、少しだけわかつ

「ただ！」

今度こそ耐え切れずに俯いて、照葉は熱に浮かされた頭でぼんやりと考える。

——わたしにとって、恋ってなんなんだろう。

照葉は未苗に出会うまで、これほどまでに狂おしく他人のことを考えた事はなかった。かけがえのない存在、と言うなら、家族もそうだと思う。普通の友達だって大切だ。

けれど、照葉は未苗に恋している。

それはとても不思議な感情で、照葉がよく知っている哲学の巨人や科学者たちは、照葉にとっての答えを見せてはくれなかった。ただ、今抱いている気持ちが恋なのだと、照葉は断言することができ

る。
「照葉ちゃんが好きって言うてくれたとき、わたしすごく嬉しかったよ。わたしが好きって答えたとき、照葉ちゃんも同じくらい嬉しいって思ってくれたらいいなって思った。それが恋なんじゃないかなあ？」

同じにはなれないけれど、同じ気持ちを抱いていたい。

そんな気持ちがあるのかもしれない、と照葉は思っ、なんとなくはなしに口が開いた。

「私、未苗のこと、好きだよ」

「うん。わたしも」

二人の恋は、まだ形のない水のように。けれどその水は透き通っていて、温かい。

ながれるもの（前書き）

ショートストーリーが続くだけだと思っていたら、どうも話に起伏をつけたようになってきたようです（作者が）

ながれるもの

「きれいな花だね！」

道端に、雪に紛れるような純白の水仙が咲いていた。

「うん……」

照葉は夢心地で未苗の横顔を見つめている。未苗の瞳は希望の火で満たされていて、溶けかけた雪など溶かしてしまいそうだ。

その燃えるような宝玉の瞳を見るたび、照葉の心には嫉妬の炎が燃え移っていた。未苗が希望を振りまくたび、照葉の心は深い沼に沈むようだった。

しかし、それは少し前までの話。

「ねえ、照葉ちゃんはなにかに嫉妬することって、ある？」

「え……それは、あるけど」

「わたしは、すごく嫉妬しがちなんだ。自分でもかっこ悪いな！って思うけど、劣等感っていうのかな、そういうのが強くて」

いつも笑顔を絶やさない未苗にそんな一面があるなんて、照葉は思ってみたこともなかった。嫉妬と恐怖に苛まれ続けているのは、自分だけだと思っていたのだ。

「こうやって綺麗な花を見るだけでも、自分がみじめに思えちゃうときがあるんだ。少し前までは、照葉ちゃんのことを見るのも辛かったよ。照葉ちゃんって毅然としてて、かっこよくて。だらしないわたしとは大違い。そんなことを思っで、憧れたり、嫉妬したりしてた」

「今も、そう思ってる？」

「ううん。今はぜんぜん思わないよ。だって、憧れの人だった照葉ちゃんが、わたしのことを認めてくれてるから。そうしたら、劣等感なんてなくなっちゃった」

未苗に笑いかけられて、照葉の心はじわりじわりと温まっていく。
「ね、未苗。わたしもずっと、嫉妬してたんだよ。未苗が楽しそ

うにいろんなものを見るたび、未苗に見られているのがわたしじゃないっていうのが悲しくて、見られているものが妬ましくて。でもね、今は未苗が見てくれてるってわかるから、嫉妬なんてしてないよ」

「へへ、ありがと、照葉ちゃん。なんかやな話になっちゃって、ごめんね」

「ううん、いいよ。話せるだけ、たくさん話そう？ 未苗と話せるだけで、私は幸せだから」

二人は手を繋いで、家路を歩み始める。

セルバンテスの言葉に、『嫉妬のない愛はあるかもしれぬ。だが恐れのもとなわぬ愛はない』というものがある。

確かに、今の二人に嫉妬はない。二人の心は限りなく近いところにあって、恋の水はどこまでも透き通っている。濁った妬みや嫉みは水の外から入る余地もない。

けれど、なにかが水に入ってくる恐怖。そして、溺れてしまいそうな恐怖は、常に二人に付きまとっている。恐怖が形を持つのはいつかわからないが、いずれその時は来る。

水は、流れずにはいられないのだ。

——遠くから学校のチャイムが響いてくる。

どうか、ずっと鳴り響いていてほしいと、二人は願った。

この幸せな時間が、いつまでも続きますように。

哲学するかみさま

雪の積もった参道の階段を、照葉は一人で上っている。

綿のようにふかふかした雪は、踏むたびきゆるきゆると音がする。照葉が昔住んでいた西の方の街では、こんなに柔らかくて乾いた雪は降らなかった。その街に降る雪はじつとりと湿っていて、照葉もずいぶんと気分を滅入らせたものだ。

周りから向けられる善意と愛情が、湿った雪のようにまとわりついたあの頃。決して不幸ではなかったけれど、少なくとも幸福ではなかった日々。

——それから病気が治って、新しい土地に引っ越して、そして未苗と出会って。

一陣の春風が照葉の心にまとわりついた雪を溶かし、吹き飛ばしていつてくれたのだ。だからもう、照葉の身体は羽のように軽い。階段を上りきって境内に出ると、照葉は拝殿の賽銭箱に寄り掛かって座る少女を見つけた。長い黒髪をおかっぱに切りそろえた、小学生くらいの女の子。

「かみさま、こんな日にどうしたの？」

かみさま、と呼ばれた少女は、まるで老人のようにゆっくりと視線を上げて、照葉の方を見た。

「あたしは『てつがく』しにきたの。冬の神社って、静かでてつがくにはもってこいでしょ？ 巫女さんこそ、どうしたの？」

「年末だし、雪かきだけでもしておこうと思って」

「あたしも手伝う。スコップ持ってくるね」

走っていくかみさまの背中を見て、照葉はくすりと笑う。神様と巫女さん。二人の出会いはとても不思議で、関係も同じくらい不思議だった。お互いの名前は知らず、初めて会った時に呼びあった名前で呼び続けている。

二人の出会いについては、また別の話。

「持ってきたよ。巫女さん、こんな時まで御苦労さまだね」

「ありがと。ぜんぜん苦労じゃないよ。いつものことだから」

神社は照葉の家から歩いて数分の場所にあり、照葉は時たまお参りついでに掃除や雪かきをしに来ている。

そんな時に偶然出会ったのが、この哲学するかみさまだ。

「あたしは家でてつがくしてたんだけど、こたつはてつがくに向かなかった。すぐ眠くなっちゃう」

「でも、神社は寒いでしょ？」

「寒いけど……てつがくとは、現実に対するある種の復讐だから。あまのじやくにならないといけないんだよ、きつと」

ニーチェの言葉を借りながら、手に息を吹きかけて寒そうにこすり合わせるかみさま。かみさまは照葉が思ってもみないような鋭いことを言うけれど、見た目や仕草は可愛らしくて年相応だ。

「今日はなにを哲学してたの？」

さくり、と照葉は柔らかい雪にスコップを通す。刃先からこぼれた雪の粒が、日差しを受けて星のように瞬いた。

「しあわせとは、なにか」

かみさまは照葉よりも一回り小さなスコップで、せっせと雪を運ぶ。

「充実した一日が幸せな眠りをもたらすように、充実した一生は幸福な死をもたらししてくれる。ダヴィンチの言う通りなら、幸せって充実のことじゃない？」

「でも、しあわせは苦しみの最小量によつてはかられるって」

これはルソーの言葉。かみさまは歴史上のあらゆる人たちと友達なのだ。

「うーん、それじゃあ、充たされていることだけが幸せじゃないのかもしれないね」

「巫女さんのしあわせは、なに？」

照葉の苦しみが最も少ない時。それは間違いなく、未苗のことを考えているときだ。

——それが、幸せなのかな。

当たり前のことだったけれど、なんとなく当たり前すぎて、照葉は考え込んでしまった。

好きな人のことを考えるとき、照葉は幸せだ。けれど、好きな人とはなんだろう。大切な人、かけがえのない人。型押ししたみたいな言葉が次々と浮かんで、雪のように淡く溶けていく。

そして、わたしは未苗について、なにを考えているんだろう。

しばらくスコップを止めていた照葉だったが、やがて答えが浮かんで、かみさまに優しく笑いかけた。

「私が幸せなのは、誰かのことを考えて、誰かに考えてもらっているとき、かな」

「じゃあ、いま巫女さんは幸せ」

「どうして？」

「巫女さんはあたしのために考えてくれて、あたしは巫女さんの答えを待ってた。これって、幸せなんですよ？」

「ふふ、そうかもしれないね」

冬の日差しが、やわらかく二人を包んでいる。

こんなに冷たい朝なのに、胸の奥はじんわりと暖かい。

お餅と初詣（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

前回は未苗が登場しなかったのですが、今回は未苗再度のお話を。

お餅と初詣

——なんとなく未苗の様子が変だな、と思う。

未苗の姉である桐瀬は、未苗のことならだいたい知っているつもりだった。

年の近い姉妹ならわりあい当然の話。高校だって同じだから、嫌でもわかってしまうことばかりなのだ。

けれど、冴え渡っていた鏡に曇りが広がっていくように、桐瀬は未苗のことを見失いかけていた。

「あけましておめでとう！ お姉ちゃん」

「んー、あけましておめでとう、未苗」

元旦の朝だからと言っても、朝齢のはどうにもならない。桐瀬は間延びした声で応えながら、雑煮に火を入れる。

昆布だしに醤油を加えただけのシンプルなお雑煮。この地方ならではの味だが、なんだか地味だな、と桐瀬は思う。

「地味なわたしにお似合いなのかなあ」

さいばしの先でつん、と柔らかくなり始めた餅をつついて、みじめな気分になる桐瀬。

桐瀬の肌は白くつややかで、柔らかさも餅と似ている。けれど、桐瀬本人はそれが気に食わなかった。

女の子は、竹で作った骨組みに絹を折り合わせたくらいがちょうどいい。おしとやかで、控えめで、吹けば飛んでいきそうな儚さを持つている。桐瀬の理想はまるでおとぎ話のヒロインのようなもの。そんな子が現実にいるわけなんてない。けれど、人は理想を通して他人を見る。見る方としても、見られる方としても、桐瀬は例外ではなくて。

ただ、ただ、桐瀬は理想を自分に当てはめることに必死だった。

「お姉ちゃん、初詣どうするの？」

「わたしはまだいいわ。まだ、ちょっと眠たいし。朝ごはんが終

わつたらもうひと眠りしようかな」

「お姉ちゃんの『まだ』は何日もかかっちゃうよ！」

「いーじゃない。一年で初めて神社に行けば初詣なんだから、いつ行つたつて一緒だよ」

「だめだめ！ お姉ちゃんは今年受験なんだから、急いでたくさん回らないと！ 照葉ちゃんに聞いたんだけど、神社はたくさん行けばいくほどこいいらしいよ！ 神様ってみんな仲良しなんだね？」

楽園で育つた子供のようになつて笑う末苗を見るたび、桐瀬の気分は少し落ち込む。

それは小鳥の羽一枚にも満たないような重さだけれど、降り積もるたびにちくちくと桐瀬の心を刺す。

——わたしもこれだけ女の子らしかつたら、どんなに良かっただろう。

「照葉さんと末苗の方が仲良しでしょ？」

「んー、仲良し、つて言つていいのかな」

「どうして？」

桐瀬は末苗から『照葉ちゃんわたし親友なの！』と事あるごとに聞いていた。親友なら仲良しなのが当然で、それ以外の関係なんてありえない。桐瀬の想像力は、そこで止まっていたのだけれど。

「わたしね、照葉ちゃんのこと好きだけど、近づきすぎたらいけないと思うの。照葉ちゃんには照葉ちゃんの生き方があつて、わたしがそれを変えちゃいけないし。わたしは仲良しになることつて、相手と一緒になつていくことだと思うんだ。でもねでもね、全部一緒ににはなれないから、仲良しには限界があるのかなーつて」

「ううん……なんだか、難しいわねえ」

ぼんやりした頭で考えるのが億劫だつたわけではなく、心から難しいと桐瀬は思つていた。仲良しの近さなんて、考えてみたこともない。友達みんな友達つていう属性の持ち主で、その差はあまりない。ちよつとした共通項を持つている人たちの集まり。親友はその中でも近い一人。言葉にして考えてみたわけではないけれど、

桐瀬は無意識にそう思い込んでいたのだ。

「それは難しいよー。だって、照葉ちゃんの受け売りだもん」

「へえ……凄いのね、照葉さんって」

「うん！ 照葉ちゃんはずいよ！」

未苗の表情にはかすかな影すら見当たらない。

——わたしは、ここまで真つすぐに自分の友達を自慢できるかな。

悔しいような、羨ましいような、複雑な気持ちちが桐瀬の心を渦巻いて、口からぽとりと言葉をこぼした。

「それじゃ、初詣、行こっか？」

「え、ほんと？ どうして？」

未苗は心底驚いているようだった。普段から頑固で保守的な老人のように振舞っている桐瀬が、簡単に意見を変えることは少ない。

「照葉さんに、新年のあいさつをしたくなつたのよ」

新しい年、新しい生活を控えて、臆病だった自分を変える時が来たのかもしれない。

「さ、先にご飯を食べましょ。いただきます」

桐瀬は不安と希望を同じだけ吸いこんで、白い餅に吹きかけた。

祈り

一年のはじまりは、特別な時期だ。

いつもは静まり返っている神社も、ほんの少しだけにぎやかになる。けれど、ここに大きな神社ほどのにぎわいはない。地元の人々が集まって、新年の挨拶を交わし合う。ちょっと特別な町内会のような雰囲気だった。

「照葉ちゃん！」

未苗は照葉の姿を見つけるなり、駆け寄って手を取った。

「あけましておめでとう！」

「あけましておめでとう、未苗」

照葉は突然のことに少し面食らいながらも、未苗の無邪気な笑顔に顔をほころばせた。

——今年も、よろしくね。

照葉は心の中で小さく呟いた。カレンダーを見ていなければ、こんなにも特別な気持ちにはならない。

元旦は不思議な日だ。変わりばえのしない毎日に、大きな区切りを作ってくれる。

「今日はお姉ちゃんと来たの。照葉ちゃん、会ったことなかったよね？」

「うん、まだ会ったことないね」

照葉は未苗の口から何度も姉の話聞いていた。

のんびりした人。可愛らしい人。優しい人。

未苗の話からは、桐瀬のそんな人柄が滲みだすようで、照葉も会ったのを楽しみにしていた。

「あけましておめでとう、照葉さん。未苗の姉の桐瀬です。いつも妹がお世話になってます」

「あ、あけましておめでとうございます。関野照葉です。未苗さんには、仲良くしてもらってます」

聞いていた通りの、柔らかい物腰。可愛らしい笑顔。

――素敵な人。こんな人こそ、未苗の姉に相応しい。

けれど、その好意とは裏腹に、桐瀬はある種の悲嘆に暮れていた。

――ああ、こういう人が、いてしまうんだ。

桐瀬が思い描いていた理想通りの姿。『女の子』という言葉を、レースで飾り付けて、高原の別荘に飾ったような。

桐瀬の目から見た照葉は、まさにそんな少女だった。

――素敵な子。こんな子こそ、未苗の友達に相応しい。

そんな二人の思いを知ってか知らずか、未苗は雪の上でスキップしている。

「ねえ、照葉ちゃん。もうお参りは終わった？」

「ううん、私も今来たところだから」

「じゃあ、一緒にお参りしようよ！ お姉ちゃんも！ ほら！」

「え、ええ……」

未苗は二人の手を引いて、石畳の道を歩いていく。

照葉はすぐ未苗の隣に並んだが、桐瀬はしばらく一步後ろを歩いていた。拝殿の目の前までやってきて、ようやく三人が横に並ぶ。

桐瀬は妹の姿をちらと見ながら、祈る。

――今年は、わたしも変われますように。

未苗はしっかりと両目を閉じて、祈る。

――今年も照葉ちゃんと一緒にいられますように。

照葉は祈る未苗の姿を見てから、自分も目を閉じて祈る。

――今年も未苗が幸せでいられますように。

かがり火がぱちぱちと音を立てて、煙と共に三人の祈りを空高く運んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8007z/>

照葉と未苗

2012年1月9日04時48分発行